

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：32636

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05584・19K20793

研究課題名(和文) 審美的距離を利用して創造的談話産出を刺激する即興やりとり活動：即興劇を手掛かりに

研究課題名(英文) Improvisational interaction that incorporates aesthetic distance to inspire production of creative discourse: application of improvisational drama

研究代表者

三野宮 春子 (Sannomiya, Haruko)

大東文化大学・文学部・特任准教授

研究者番号：90632406

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、外国語学習における相互行為の活性化を目指し、即興劇の手法を応用して審美的距離が構造に埋め込まれたアクティビティの開発を行った。文献調査や既存ゲーム調査の過程で開発課題を特定し、体験型ワークショップ「英語アクティビティ工房」を定期的で開催して、アクティビティ試用とデータ収集を繰り返した。活動過程の逐語記録を作成し会話分析を行った結果、<現実を生きる自己>と<虚構空間で表現する自己>との隔たりによって、リスクな表現にも臆せず挑戦する様子が確認できた。本課題の一部として、アクティビティ開発場面で活用されるエビデンスを考察する研究や、アクティビティ体験のリフレクションの研究も実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の鍵概念である「審美的距離」は、芸術と現実を隔たてる様々な技法や装置が絵画や詩を鑑賞する人に与える影響を指して美学において論じられることが多く、表現者側にとってどのような意味を持つかは、それほど注目されてこなかった。また、一部の応用演劇実践者のあいだでは、安全な自己開示を支える虚構の効用と、表現者のリスク取りを支える配慮が重視されているが、学術的検証はまだ十分に行われていない。さらに、審美的距離の外国語教育への応用に至ってはほぼ手付かずと言える状況で、本研究は先駆的役割を果たした。What a day!!やPS&Uをはじめとする自作アクティビティも本研究の成果である。

研究成果の概要(英文)：This study developed EFL (English as a Foreign Language) activities that fostered interactive learning, applying the techniques of improvisational drama to embed aesthetic distance in the activity structures. Concrete goals were set in the course of literature review and research on existing games, and the trial use and data collection were repeated in the periodically-held hands-on workshop of the EFL Activity Studio. As a result of conversation analysis of the activity transcripts, it was found that the gap between the participants' <elves that lived the real lives> and <the elves that expressed oneself in a fictional space> gave them the permission to try risky expressions.

As part of the present project, an interview research was conducted to examine evidence useful for practitioners in activity development settings, and a study on reflection based on EFL activities was also carried out.

研究分野：外国語教育

キーワード：審美的距離 外国語教育 アクティビティ開発 会話分析

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の鍵概念である「審美的距離」は、芸術と現実を隔たてる様々な技法や装置が絵画や詩を鑑賞する人に与える影響を指して美学において論じられることが多く、表現者側にとってどのような意味を持つかは、それほど注目されてこなかった。また、一部の応用演劇実践者のあいだでは、安全な自己開示を支える虚構の効用と、表現者のリスク取りを支える配慮が重視されているが、学術的検証はまだ十分に行われているとは言えない。さらに、審美的距離の外国語教育への応用に至ってはほぼ手付かずと言える状況であった。

(2) これまで外国語教育研究の主眼は、細分化された言語要素の知識獲得や技能習得のために認知・知覚などの諸機能に働きかけることにあった。よって知識・感情・身体感覚などが統合された「外国語話者になりつつある主体」の発達をどう支援するかという視点が欠落しがちである。昨今の外国語教育には、ビジネス場面で出現するような言語使用に照準を絞り、遊びに見られる言語のパターン化や感情に働きかける対話などが過度に軽視される風潮があると指摘される(たとえば Cook, 2000)。また、真正性の問題を狭く捉え、日常的な言語の使用場面を直接に反映しない言語活動を授業に取り入れることを躊躇する傾向もある。しかし、R. Ellis (2003) が論じるように、遊びの要素を含む活動に刺激されて生まれる相互作用の真正性 (interactional authenticity) は正当に評価されるべきである。

(3) 海外では即興劇の手法を外国語教育に応用する実践が以前からあるものの、研究方法の困難さもあって、学術的には殆ど取り上げられていない。国内では最近ようやく即興劇への注目が集まり始めたところと言える。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的の一つは、即興劇の手法を用いて、審美的距離が埋め込まれた構造を持つ英語アクティビティを開発することであった。応用演劇では、役を演じる自己と日常を生きる自己との隔たりを審美的距離 (aesthetic distance) と呼び、社会的面目を心配せずに考えや感情が表現できる空間と考える。外国語学習においても、予定調和的な表現の枠を超えて話者として発達するための安全なリスク取りを励ましあえる社会的環境が必要である。即興で表現するリスク取りを要求する仕掛けと、リスク取りを安全に行える仕掛けを両方含むアクティビティの開発を目指した。

(2) 本研究のもう一つの目的は、会話分析によってアクティビティ過程の相互行為の様相に接近し、外国語教育における審美的距離とはいかなるもので、どのように外国語学習者の発達を支える要因になり得るかを考察することであった。即興劇の原理を応用した言語活動の構造は、発話一つ、動作一つごとにコミュニケーションの状況を変化させる。また、各ゲーム固有の構造と言語構造の相互作用の結果、生産される言語・準言語・非言語表現の特徴も違ってくる。学習者はその変化に柔軟に対応し、他者と協働で意味生成を行うと期待された。

3. 研究の方法

(1) 研究目的を果たすために、先行文献調査を行い、鍵概念 (審美的距離・創造性・協働性など) の明確化を図った。応用演劇の思想と手法、社会文化理論、教室談話やエスノメソドロロジーなど、外国語教育領域にとどまらず、関連する諸分野の学術的知見の整理を試みた。

(2) 即興劇を応用して、審美的距離が構造に埋め込まれた英語アクティビティを開発した。アクティビティ開発は、決まった手順で行えば狙った効果が得られるという性質のものではない。よって、試用と改良を繰り返し、その過程で活動構造の変更点とその結果 コミュニケーション行為の創造性に生じた変化 の関係を省察しながら行った。大学生以上を対象とするワークショップ「英語アクティビティ工房」を定期的に開催して、データ収集を行った。

(3) 開発したアクティビティに日本人学習者が英語で参加する際の言語・非言語コミュニケーションの描写 (特に外国語運用の即興的・創造的な特徴、審美的距離がもたらす影響について) を提供するために、ビデオ記録からトランスクリプトと静止画を作成し、会話分析を行った。トランスクリプト作成にあたっては、作成者とは別の人が点検を行うことにより、信頼性 (reliability) を確保した。

4. 研究成果

(1) 「英語アクティビティ工房」ワークショップをはじめとする多様な機会に、即興劇や即興ゲームを英語で体験したり、それを英語学習用にアレンジしたり、一から新しいアクティビティを開発したりした。なかでも、**What a day!!** や **Problem Solving & Unsolving** (**Unsolving** は造語) と名付けた英語アクティビティは何度も改良を重ねてカードゲームセットの形で印刷し、研究協力者や希望者に頒布して好評を得た。また、「オックスフォード大学出版局&数研出版 中学高等学校教員向けセミナー」、中英研、「応用インプロ・ネットワーク・ジャパン」、学内の講演会などにおいて、創造的発話生産を刺激する即興アクティビティの紹介と理論の解説を行った。

(2) 外国語教育では「学習者は自分のことや身近なことであれば興味を持って話す」という言説が広く浸透しているが、自分の個人情報や教室で話したり、相手の個人的な出来事について詳細に尋ねたり、反対意見を言い合ったりすれば、意図せずとも自他の気分を害してしまう可能性がある。本研究でも、事後インタビューにおいて「本当のこと」は表現を躊躇したと答えた参加者たちがいた。

対照的に、架空の人物として発言し合うときには、必ずしも現実の自己を開示する必要はない。また、架空状況の問題解決に取り組むときは、問題の背景を理解して現実的な解決方法を見出すとする切実さから解放され、どのように言語を使って議論過程を協働生成するかということに焦点を当てやすくなる。アクティビティ過程を分析した結果、現実を生きる自己とは異なる自己像を言語・非言語によって創造し合い、架空の文脈を創り上げていく様子が具体的に観察できた。その過程で参加者たちは、実生活の場面であれば自他の社会的体面を傷つけるリスクが大きい内容であっても躊躇なく表現し、その面白さを共に笑い合っていた。参加者たちが夢中になって相互行為を楽しむ過程では、数多くのエラーが出現し、そのたびに意味交渉が活発化した。

以上のような知見を整理し、論文発表ならびに口頭発表を行った。しかし、本研究の成果は既に発表済みのものにとどまらず、現在も執筆・投稿を継続中の論文もある。また、審美的距離や創造的談話の問題は、身体化の問題との親和性が高いので、**2020~2022** 年度の課題「身体化による発話と文脈の接地：即興劇を応用した英語アクティビティ開発と会話分析」(課題番号**20K00780**)においても、引き続き探究したいと考えている。

(3) 本課題に関連して、アクティビティ開発場面で教育実践者・研究者がどのようなエビデンスやリソースを活用するか(活用しないか)を明らかにするためのインタビュー調査を行い、教育実践に役立つエビデンスがいかなるものであるかという考察を行った。また、大学の教員養成課程におけるアクティビティ体験のリフレクションについての研究も実施した。

<引用文献>

Cook, G. (2000). Language play, language learning. Oxford: Oxford University Press.

Ellis, R. (2003). Task-based language learning and teaching. Oxford: Oxford University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 三野宮春子	4. 巻 41
2. 論文標題 即興的発表型と即興的やりとり型のアクティビティ：問題解決ゲームSOLVERSの開発とコミュニケーション分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『英語教育学研究』（関西英語教育学会紀要）	6. 最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18989/seit.41.0_21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三野宮春子	4. 巻 30
2. 論文標題 実践者と研究者の協働による教材開発場面で活用されるエビデンスやリソース	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京大学学校教育高度化・効果実証センター若手研究者育成プロジェクト ワーキングペーパー	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三野宮春子	4. 巻 42
2. 論文標題 即興、すなわち、意味と表現の共時的創造：インプロを応用した模擬ワークショップ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『英語教育学研究』（関西英語教育学会紀要）	6. 最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18989/seit.42.0_47	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三野宮春子	4. 巻 51
2. 論文標題 リフレクションの留意点：学生の経験学習サイクル活用を支援するために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大東文化大学英米文学論叢	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三野宮春子	4. 巻 5
2. 論文標題 実践者と研究者の協働による教材開発場面で活用されるエビデンスやリソース	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学学校教育高度化・効果実証センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 45-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Haruko Sannomiya
2. 発表標題 Structures and aesthetic distance to inspire creative language experience
3. 学会等名 International Human Science Research Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Haruko Sannomiya
2. 発表標題 To counterbalance training-oriented foreign language education: What do creativity and aesthetic distance look like?
3. 学会等名 The World Education Research Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Haruko Sannomiya
2. 発表標題 Evidence and Resource Utilized in Material Development by Practitioners and Researchers
3. 学会等名 Joint International Seminar Towards the Realization of Sustainable Future (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Haruko Sannomiya
2. 発表標題 Simultaneous Creation of Meaning, Expression, and Pleasant Surprise in L2 Interaction
3. 学会等名 Hawaii International Conference on Education 17th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三野宮春子
2. 発表標題 機械的反復からの脱却と創造的スピーキング活動のためのリスク取り：自作カードゲーム What a day!! の談話分析
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三野宮春子
2. 発表標題 審美的距離が表現活動と言語学習に与える影響：即興のストーリーテリングの分析
3. 学会等名 日本教育方法学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>英語アクティビティ工房 English Activity Studio https://kekekepa.wixsite.com/activity-studio perform EFL teaching for transformation https://kekekepa.wixsite.com/sannomiya</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----